加に制限を加へ得るに至らば戰爭の如き絶無たるべしと。終りに米國の歐洲戰爭加入に付き論じて曰く「(一)經濟上より見るに目下米國には內亂の恐れなきは勿論、掠奪的產業階級もなく又特に自己階級の利益を計りて一般國民を度外視する產業階級もなし、且人口增加の結果食糧不足を來し爲めに外國に眼をそゝぐ必要にも逼られ居らず、(二)地理關係より見ても米國は廣漠なる海に遮ぎられ居るため他の强國の來寇の如きも想像するを得ず、故にもし米國が此の度の歐洲戰爭の渦中に捲き込まれ積極的に戰爭するが如き事あらば、こは民主國の眞髓に反するものなり」と結論せり。

## 實驗演習心理學講習會

東京市上駒込心理學研究會にては、兒童研究の實際に資する爲め、信州北安敎育部會と聯合し、來る八月一日より一週間、日本アルプス山麓、木崎湖畔、信濃公堂に於て、文學士增田惟茂、文學士土井壯良、文學士上野陽一の三氏を講師とし、心理學上の實驗發問及び統計の方法に就き、實地指導を主とする講習會を開く由。入會希望者は住所職業氏名を記し、往復はがきにて心理學研究會宛申込まば、會より諾否を通知すと。

# 新著紹介

## 聖德太子傳

塙野　黃洋著

元より謙遜ではあらうが「古い書物から得た材料のつぎはぎ多くの學者の言ひふるした研究の取りつぎ、そんなものゝ寄せ集めから出來た此の書物は歷書き直し書き直して居るうちに文章さへ筋の立たない辻褄の分はないものになつて居るかも知れない」と著者自ら述べられて居らるゝ處や、更に言葉を續けて「然しその偉大なる太子の傳を書かうと思つた裏情には毫しも僞りを留めて居ないといふ事を自分で振り返つて考へたゞけでも……」、又「此の偉人の眞面目を發揮し得る事は素より私の力の堪へ得る所ではないが之を爲さんと企てた自分の心もち丈にさへ私は重々の滿足を感して居る」といふ眞面目な告白から察すると本書は先づ嚴密な意味の研究物ではなくて何れかといへば寧ろ太子讃仰がその主眼であるらしく思はれる、隨つて著者の主觀が比較的强大な勢で內容の上に現はれて來ることも止むを得ないところであらう、であるから純學究的の立場から之を見れば或は色々な方面から批評質問せらるべき余地もあるであらう、然し若し一度深く本書述作の態度や性質を推測したならばそれは余りに酷に過ぐるといはねばならぬと思ふ、といつて私は本書の價値を學術的階級から引き落さうとするのでは決してない、たとへ太子讃仰がその主眼であるとしても決して月並の讃仰ではない、その一面に於ては確かに考證にまれ古代思想の解釋にまれ元より本書の性質上多少獨斷の誹は免れないとしても兎に角明快なる著者獨特の識見と燃ゆるが如き著者の熱心とが到る處躍如として發露せるを見る事が出來る、いはゞ盲從的外的讃仰ではなくてその讃仰たるや研究的批評的內的のものであるといひ得べきであらう。

一、緖論、二、太子の系譜及誕生、三、太子の幼時、四、馬子の大虐と太子、五、政治の改革、六、太子の外交政策、七、十七

憲法、八、太子前後の佛教、九、太子建立の寺院、十、「勝鬘」「法華」の講讃及び三經義疏の製作、十一、太子の事業、十二、太子の薨去、附錄として更に十七憲法大意が載せられてある。私は特に四、五、六、七、十、十一の各章を余程面白いと思つた、これ恐らく比較的甚大なる努力がこれ等の章に費された結果であらうと思ふ。

太子が從來往々にして人に誤解せられあらゆる曲解の下に他の嫌忌を買はれた原因の一としては馬子の崇峻帝弑虐の一事を擧げる事が出來る、太子が日本の文明に驚嘆すべき程の影響を與へて居らるゝ事は何人も拒まない所であるに關はらず常に儒者や神道者の非難を受けられたのは太子が佛教崇拜家であつたために馬子の大虐を看過して尤められなかつたといふ點にあるのであつて甚しきに至りては「八耳弑天皇是春秋之法也」とさへ論ずるものあるに至つたのである、著者茲に憤慨不能措彼等儒者等立論の資料悉く皆俗說に過ぎざるを辯じその笑ふべき虛誕の妄說に基き堂々と彼等が太子の非を鳴らすは余程妙であるとして詳細なる考證觀察を以て之を駁擊せらるゝ所の如き大に背槃に當るものがある。十七憲法に就ても諸の儒者は之を以て太子が諸惡莫作の佛教を流布する方便として定められたものであるといひ、或は憲法の中に佛教の事より儒教的道德の事が多く說かれてあるが如きこれ太子が儒教の道德を剽竊せられたものであるとさへいつたものがある、著者は之に對しても當時の狀態を推測して太子の心中には今日の我々が考ふる程未だ儒佛二教の區別が明確でなく、太子はその何れをも所謂新文明の要素として共に之を採用せられたもので佛教でない以上は儒教を採つてはいけないなどゝそれ程儒教を敵とし給ひしものとは思はれぬ、太子が佛教を信ぜられたといふ事のために直に儒道も神道も御嫌ひになられたといふ樣に太子を惡しざまにいふのは德川時代の儒者の誤解から來たものであつて全く謂れも根據もない謬想である、太子が留學生として支那に派遣された南淵請安は疑もなく儒教研究の命を受けて行た人である、太子が佛教と同じ樣に儒教をも公然御採用になつたといふ事はこの一事でゞも明に推知する事が出來ると論駁して居られる。又、著者は該博なる考證を用ゐて太子の政治思想に就てもそれが大化改新の根本の動機となつて居るとし、明治維新との關係にも及び、我國維新史上の一大偉觀として之を高調して居られる、その外交政策にしても太子の態度極めて痛快で元より所謂外國文明の崇拜者ではあつたが然し三韓に對しても支那に對しても決して軟弱の態度を取て國家の面目を損する樣な事はせられなかつたのであると論證されてある。又、太子の著作や事業に就ても諸種の資料を索尋し參考し整理し比較的精密にその眞理を傳へようとせられた努力が窺はれる。十七憲法の解釋も亦能く脈絡貫通その眞意に近きものあるを思はしむ。

要するに本書は太子の傳として成功を得たものであり我國文明の上に絕大なる寄與をなし給ひし太子を著者が誠心誠意渴仰の立場から研究的に仰讃紹介し以て人文史上の一大偉才を高揚せられたといふところにその價値があると思ふ、一般讀書界に本書の一讀を推奬し遠く太子の德を偲ばれん事を望むのである。唯然したとへ本書の性質上多少讓步する處あるべしとしても記述の前後重複の箇所多く稍冗長に失する嫌があるのと、時々言葉使に穩當を

欠く樣なものがあるなどは聊か遺憾の樣に感じた事を最後に附け加へて置き度い、(本田義英)東京小石川區原町六丙午出版社發行、菊版二三一頁、定價壹圓。

## 現代哲學批判

文學士 村澤喜代人
文學士 征矢野晃雄 共譯

丁抹コッンペンハーゲン大學教授ヘフディングの「現代の哲學者」(一九〇四年)及び「アンリベルグソンの哲學、特徴及び批評」(一九一四年)の二書を英譯より重譯し、經めて一册としたもので、「現代哲學批判」とは譯者が表題と內容とを一致せしめんが爲に、故らに改めた名である。

原著者ヘフディングは一面に於てカントの說を受け精神の本質を「綜合」にありとなすと共に、他面に於て實證哲學、進化論等にも深い同情を寄せ、其の心理學に於ては心身平行論と主意說を取り、倫理學に於ては社會的幸福主義を主張し、各種の問題について頗る廣汎なる興味を有せる著名の學者で、文藝批評家のプランデスと相並んで、現コッペンハーゲン大學の雙璧と稱せられてゐる。著書としては他に「心理學」(一八九〇年)「倫理學原理論」(一八九六年)「近世哲學史」(一八九五—九六年)「倫理學」(一九〇一年)「宗教哲學」(一九〇二年)「哲學問題」(一九〇三年)等があり、何れも我が讀書界に歡迎せられ、其の或者は已に邦譯に附せられてゐる。

ヘフディングは種々の理由により、一八八〇年を以て哲學史上の一紀元と認め、玆に「近世哲學史」の筆を絕つた。本書は其の後を承け、氏の哲學上の根本問題と認めた四問題、卽ち(一)意識の性質に關する心理的問題、(二)認識の妥當に關する問題、(三)實在の性質に關する問題、(四)價値の問題が如何に現代の哲學に於て解決せられ又は解決せられつゝあるかを闡明せんと企てたものである。以上四種の問題中第一の心理的問題に對する見解は如何なる哲學に於ても固より主要なる役目を演ずべきであるから暫く之を措き、其の他の三問題に應じて現代哲學の主潮を分かつときは、之を(一)主として實在の問題に思を寄せる組織的傾向(二)認識の問題を中心基調となす認識論的生物學的傾向(三)價値の問題卽ち宗教及び倫理を主題とせる價値の哲學の三系統とすることが出來る。ヴント・アルディゴ・ブラッドレー・フイエー等は第一の派に屬し、マクスウエル・マッハ。ヘルツ・オストワルト・アフエナリウス等は第二の派に屬し、ギユヨー・ニーチエ・オイケン・ゼームス等は第三の代表者である。本書の特徴は譯者も言へる如く、是等多數の哲學者を斯く「分類的に取扱」ひ、其の特徴を明らかにし、「近世哲學史」と相待ち、文字通りの近世哲學史を完結した點にある。此の意味に於て本書は「近世哲學史」の姉妹篇とも補遺とも見るべく、單獨に考ふれば現代哲學の一部に對する——敢へて全部とは言はない——好箇の鳥瞰圖である。「近代哲學史」に於て著者の歷史的洞察と批評的見識とに引きつけられ讀者は自ら本書の卓越せる價値を認めざるを得まい。各哲學者中別著として現れたベルグソンを除けば、ギユヨーとニーチエの叙述に——著者自身も斷はつてゐる如く——最も力を致し、オイケン・ゼームスの二氏については其の宗教哲學の一面を精叙するに止り、認識論的生物學的傾向に至りては多少簡約に失せずやとの疑を起さしめる。恐くは